



Title	エア・プラズマアーク切断用RU-, Ir-Y203系電極材料の開発と有効性に関する研究
Author(s)	楠元, 一臣
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/38203">https://hdl.handle.net/11094/38203</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href=" <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> ">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	楠 元 一 臣
博士の専攻分野の名称	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	第 1 0 4 2 5 号
学位授与年月日	平成 4 年 9 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科 溶接工学専攻
学 位 論 文 名	エア・プラズマアーク切断用 Ru-, Ir-Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 系電極材料の開発 と有効性に関する研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 松田 福久 教 授 西口 公之 教 授 中尾 嘉邦 教 授 小林紘二郎 教 授 牛尾 誠夫

### 論 文 内 容 の 要 旨

近年、作動ガスに圧縮空気を用いたエア・プラズマアーク切断機は薄板材等の切断分野を中心に急速に普及している。この経済性の優れた切断法は、使用の便利さもあって今後も拡大していくものと予想されるが、今日の生産システム等に十分に対応するには、現在の Zr や Hf 電極の耐久性では十分とは言えない。

このため、本研究は最も実用性に富んでいる 50A 程度以下の小電流型エア・プラズマアーク切断機を対象として、耐久性の高い電極材料の開発を行なうこととした。

本論文は、全体が七つの章で構成されている。第1章は緒論であり、本研究の歴史的背景および目的を述べた。第2章では、エア・プラズマアーク切断用電極として適当と思われる材料群を物理・化学的性質およびアーク放電機構から検討した。そして、高融点金属に低仕事関数の酸化物を添加した焼結型の試作電極に対して予備的な耐久性評価実験を試みた。その結果、Ru-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> および Ir-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 系電極は Hf 電極に比べて耐久性が期待できることを示した。

第3章では、Ru-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> と Ir-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 系電極における酸化物の添加量と消耗量との関係を詳細に検討し、各電極系の中で最も良好な耐久性を示す成分比を明らかにした。次に連続点弧および多数回点弧時の消耗特性を検討した結果、885Ru-15Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> と 85Ir-15Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 電極は Hf 電極に比べ約 3 倍の耐久性を有することを明らかにした。

第4章では、Ru-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 系電極の消耗特性を焼結材（バルク材）の熱的・電気的物性値から検討した。80Ru-20Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 烧結材の熱伝導率は Hf 材より高く、電気抵抗率は Zr や Hf 材に比べて低いことを確認した。そして、Ru-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 系電極の Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 添加量と消耗量との関係をバルク材の電気抵抗率から説明した。

第5章では、開発した電極ならびに Hf 電極の消耗過程をチップ電極のアーク放電現象から検討した。その結果、放電中の Ru-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> および Ir-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 系チップ電極の陰極挙動は、酸化性雰囲気 (Ar-O<sub>2</sub> ガスや圧縮空気) では陰極表面を Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 層が覆った状態で放電が行なわれ、非酸化性雰囲気 (Ar や N<sub>2</sub>) では金属 Ru, Ir が陰極表面に露出した状態で、同時に陰極物質のスパッタ（飛散）を伴いながら放電が行なわれることを明らかにした。

第6章では、第4および5章で得られた実験事実を基に Ru-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> および Ir-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 系電極の消耗機構を検討した。その結果、Ru-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> および Ir-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 系電極の良好な耐消耗性は、圧縮空気中の O<sub>2</sub> が熱電子放出能に優れた Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 層を陰

極表面に定常的に維持させているためと説明した。最後に、本研究において開発した電極材料の有意性について述べた。

第7章では、本研究で得られた結果をまとめた。

## 論文審査の結果の要旨

薄板鋼材等の切断を中心に普及しているエア・プラズマアーク切断機の電極材料としては、もっぱらZrやHfが広く用いられているが、この種の電極は耐久性の点で問題があり、近年の高度化された生産加工技術の要求に十分応えているとはいえない、これに代わる性能の優れた新しい電極材料の開発が期待されている。本論文は、この点に着目して、高融点金属と放電特性の良好な酸化物を複合した焼結型電極の試作検討を行ない、耐久性が期待できるRu-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>およびIr-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系電極を見いだしている。さらに、開発したこれらの電極の最小消耗量を示す成分比を見いだすと共に、その消耗特性および消耗機構を検討し、その優れた理由を明らかにしている。得られた主な成果は次のとおりである。

- (1) エア・プラズマアーク切断用電極材料には高融点でしかも熱・電気伝導性の良好な白金族(Ru, Ir)と高温において安定で仕事関数の低い酸化物(Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)との複合材料が適していること、および最小の消耗量を示すY<sub>2</sub>O<sub>3</sub>添加量は約10~25mass%であることを見いだしている。そして、その理由について考察を加えている。
- (2) 焼結型電極の消耗は、焼結体の緻密度に影響され、良好な耐消耗性を得るには焼結時に絶縁性の化合物が生成せず、密度比が約90%以上の緻密な組織が必要であることを明らかにしている。
- (3) 連続点弧消耗試験(アーク電流25A)の結果、85RU-15Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>および85Ir-15Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系電極はHf電極に比して約3倍の寿命を有することを示している。また、多数回点弧消耗試験においても、上記の電極はHf電極に比して約3倍以上の耐久性を有することを確認している。
- (4) Ru-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>およびIr-Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系電極のアーク安定性や耐消耗特性は、Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>添加量ならびに作動ガス中の酸素や窒素に大きく影響され、放電部のY<sub>2</sub>O<sub>3</sub>層の被覆状態に主に律速されることを直接観察および表面分析の結果を利用して明確にしている。

以上のように、本論文は従来の電極に比して耐久性の優れた新しいエア・プラズマアーク切断用電極材料の開発を行なうと共に、その消耗機構に関して多くの新しい知見を得ている。これらは今後のアーク切断加工ならびにアークプラズマ応用技術の進歩に有用な基礎資料を与えており、その成果は溶接工学ならびに生産加工技術上寄与するところが大きい。よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。